

# No.33 江上 計太 —無題—

Keita Egami

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成 9) 年 5 月 15 日付 立川市市報記事より

## <クモの巣>

江上計太はグリッドを使った作品をつくる。彼は美術作品の最小構成単位を学者のように研究し、美しいかたちの原理を考える。このクモの巣もそれらのかたちからできている。

駐車場と女性総合センターや図書館の入っている建物とのあいだに張られた13 釐×6.5 釐のステンレス製のクモの巣に気付く人は少ない。建物に張られたこのクモの巣から見上げる空は、普段見る空と違って、青はもっと青く、灰色はもっと灰色に見えるだろう。フレームによって切り取られることによって、色はより鮮やかに、強く感じられる。

この作品は都会の空の大切さをより深く私たちに感じさせてくれる。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

美術家が作品を作る目的は、それを自分の眼でみたいがためという言葉につきると思うのですが、実際に見るという段階に至れば、どんな作品もすでにそれ自体として孤立して存在することはなく、常に何らかの特定のコンテクストとの関連の内に置かれることとなります。

作品のコンテクストとは単に作品が置かれる場所だけを指すのではなく、それを見る人の価値意識をも含む概念であり、いずれにせよ、作品を見るということは同時にそのコンテクストを見ることでもあるのです。そして、芸術作品に限らずどんな事物も、実際にはそのコンテクストとの相関関係の変化に応じて、その価値や機能も変化するのです。

これは、作品がいつも一方的にそのコンテクストに対して受動的に隷属するものだけということではなく、逆にそのコンテクストにアクティブに作用して破壊的な変化をもたらすこともあり得るということです。したがって、作品の芸術的価値や機能に関しては、単にその作品自体の形式的特性が示す美的な質の高低だけで判断されるべきではなく、最終的にはその作品がどれだけそのコンテクストをダイナミックに変動させる力を発揮したかで決まるのです。

その場所をより生き生きした状態に一変させ得る力、見る人の固定した美意識に揺さぶりをかける力が強ければ強いほどその作品は芸術として質の高い秀れたものなのです。

そして今回の「ファーレ立川」のアート計画では、とりわけ今述べたような意味での芸術性が極めて困難なまでというのも、この場合の作品のコンテクストは、例えば美術館のように予めそこに置かれるべき特定の芸術(絵画、彫刻)を想定してその種の既存の芸術のために特別つけられた特権的なものではなく、様々の機能、目的、欲望を携えた雑多な建物と人々が入乱

れる現実の都市環境であり、しかもそこに置かれる作品の多くは、芸術として機能すると同時に車止め、換気塔、道標、etc....その都市環境を構成する様々のコンテクストに応じて必要な具体的機能を満たす実用品であることが要求されているのです。

これは芸術が成立するのに極めて困難な条件だと言わざるを得ませんが、それゆえにまた最高の芸術の見せ場でもあるのです。

かつて公衆便所から美術館内に移動された便器は、そのコンテクストを大きく動揺させる力を発揮し、極めて高い芸術性を示しました。

では公衆便所内に置去りにされた便器がそれと同じくらい高レベルの芸術性を示すには一体どうすればよいのでしょうか？

私にはわかりません。そしてわからないから面白いんです。